

勿論前世紀の著作たる本書が現代吾人の求むる如き歴史の性質を完全に有するものではないことは確である。餘りも多數の歴史的事件の羅列が吾人をして却つて其時代全體の把握を妨げてゐる、例へば蒙古將校の基督教侮辱等の事件の頁を經る其の次頁には忽ち蒙古朝廷に於ける基督教信仰の事件が何等連絡なく擧げられて、其處に少しの説明も與へられて居ないのである。本書の價値は言ふ迄もなく寧ろ其史料として吾人が利用し得る上にある。原著が多數のシリヤ、アラビヤ、波斯、土耳其語等の稀觀古文書を縦横に驅使した博引傍證の點にある。其歴史事件に對する緻密正確な考證の所以は前述の彼自身の時代及原著の序文に見ゆる處よりしても容易に了解できる。田中博士の譯本も既に定評ある翻譯で其に加へて文中の固有名詞の殆總てに支那史籍と同一の漢字を當て嵌めた點に於て優れるものである。

從來我國の蒙古史研究に原著と譯本が必ず並用されて元史と共に其諸史料の根幹とする風のあるのも全く其が爲であつて、今新に第二部が譯出され、加之譯本のみに對する索引が作られて祭末に附せられたことと實に有意義なこと、言はねばならぬ。それにつけても支那史料の僅少なる汗國に關して、詳細なる記述をなして居る原著第三・第四部の翻譯が何人かの手によつて一日も早く出刊せられることが望ましい。(七三四頁、價六・〇〇、丸善發賣)(内田)

●市村博士
古稀記念 東洋史論叢

紹介

東洋史學界の長老市村博士が古稀に達せられた祝賀論集である。還曆記念論集は白鳥博士のを始め多數出たが、古稀記念は此を以て嚆矢とする。先の大正十四年白鳥博士の還曆記念論叢には執筆者二十五名を數へ、八年後の今日では何れも推しも推されもせぬ大家として學界に重きをなして居られるが、今回のでは約二倍に近い四十四名に達し、舊に比し更に二十數名の新進を加へたわけである。市村博士の壽と共に祝福さる可き學界の慶事であらう。されば本書の紹介に當りても主に新著稿者を中心として筆を執る事とする。

第一に氣のつくは法制・經濟に關するものが多い。加藤繁博士『唐宋時代の草市及び其の發展』青山定男氏『北宋の漕運法に就て』濱口重國氏『秦漢時代の徭役勞働に關する一問題』三島一氏『唐宋時代に於る貴族對寺院の經濟的交渉に關する一考察』仁井田陞氏『唐宋時代の家族共産と遺言法』牧野巽氏『永樂大典本宋吏部條法に就て』清水泰次氏『明末の軍餉』などがそれである。而して唐宋時代が特に多い理由は敦煌發見の古文書などに刺戟されたせいもあらうが、又宋代は支那に於る近世的社会形態が出来上つた時であり、その淵源を尋ねるとどうしても唐代まで遡る必要がある爲ではなからうか。

第二には朝鮮關係のものが多い。稻葉岩吉博士『高麗國經を讀みて』奥平昌洪氏『朝鮮通寶錢考』孫普泰氏『長生考』島山喜一氏『鮮民白衣考』中村榮孝氏『李朝時代の耆老所に就いて』李丙憲氏『所謂箕子八條教に就て』などがこれである。朝鮮に京城大學

なる文化の中心が出来、又朝鮮出身の學者が輩出すると共に、李朝實錄の覆刻の出来たことなどの影響でもあらう。

次に考古學では濱田耕作博士『倭と桓とに就て』原田淑人氏『秦の金人の形態について』の外、江上波夫氏『漢代の狩獵動物の圖様につきて』駒井和愛氏『支那古代の車馬狩獵文に就て』は何れもスキタイ文化の影響でなく支那独自の發達として認めようとする。出石誠彦氏『上代支那の巨甕説話の由來に就て』が、矢張支那獨特の神話に歸着せしむると同様な行き方で、支那文化の起原に關する學說現今の大勢である如くも見られる。

西域關係では白鳥庫吉博士『大秦の木羅珠と印度の如意珠』大谷勝眞氏『鄯善國郡考』白井長助氏『上代于闐國の都城の住置に就て』松田壽男氏『碎葉と焉耆』などがあり、相變らず微に入り細を穿つた精密な考証が試みられてゐる。

元代の研究も亦相不變盛である。和田清氏『北元の帝系につきて』畠井大慧氏『元史に見えたる些即元該に就いて』青山公亮氏『成吉思汗時代の所謂漢官特に行省に就いて』少しく趣は異にするが、羽田亨博士『舞樂の渾脫といふ名稱につきて』重松俊章氏『初期の白蓮教會に就て』長澤規矩也氏『元朝私刻本表』などがある。

其他思想史的なものに、板野長八氏『晋南渡以前に於ける佛敎思想の一考察』高田眞治氏『敎天思想の發生に關する考察』などあり、日支關係には秋山謙藏氏『論曲唐船と倭寇』田保橋潔氏『琉球藩民蕃害事件に關する考察』がある。

以上の分類は理論的には體をなさぬものであるが、現今どんな事が問題とされつゝあるかを見るため、強ひて試みたものである。外に十數篇の力作があるが其標題すら割愛せねばならぬのは遺憾である。近頃雜誌に掲載される論文が次第に長くなる傾向があつて讀破に困難を感じるが、本書は寸鐵的な短篇が多いので退屈せずに讀まれる。(富山房發行。本文二一四頁。定價金五圓八拾錢)

國民東洋史大綱
滿洲國歴史

矢野 仁一著
同

先に「近代支那論」「現代支那研究」「滿洲に於ける我が特殊權益」などで矢野博士の滿蒙・回・藏は支那本來の領土に非るの論が出てから、支那の學者邊によつて帝國主義・侵略主義政策を辯護するもの、如く誤解されたその誤解を解かんが爲に「滿洲國歴史」が現はれた。

第一編は滿洲を以て支那の一部なりとする國際聯盟の觀點の誤れるを正し、之に對する我が外務省の意見書の不足を補訂し、第二編はリットン報告書の基礎となつた滿洲は支那の完全な一部であるといふ支那の學者の主張を駁するもので此兩章が序論となり、第三編滿洲國史梗概は戰國以來滿洲の歴史を述べ、以上の所論の根據を事實をあげて證明し、尙餘論として第四編滿洲國の建國とその使命、第五編滿洲事變の核心を論ず、が附加され、最後に著者は、滿洲が支那の領土でないといふ事は、直に日本の領土であるといふ事ではなく、滿洲國の成立は歴史的

必然性に従へるものであるから、第六編として日支兩國は滿洲國の獨立を協力扶翼すべしといふ結論がある、これが著者の心願なのである。

「國民東洋史大綱」は博士が中等學校教科書に宛んが爲に編纂されたのであるが、六ヶ敷過ぎるといふので單なる一般の讀物として世に送られた。博士には中等歴史教育に就て、獨特の持論がある。現今普通には生徒には簡單なものを與へて、教師が詳細な庚の巻を見て、簡單な所へいろいろのものを附け加へてゆくのが教授だと思つてゐるが之は間違ひである。それで教科書を折角簡單にした意義を失ひ、且は教師が不正確なる智識を以てくだらぬ事を詰込み過ぎる弊害がある。寧ろ生徒には詳細な讀本を授けて熟讀理解させ、其中からは非必要な智識を前後脈絡させつゝ記憶せしむ可く、教師が特別な種本を持つたらば斯る意味の簡單な方を持つて然る可きである云云。

現今の教育には幾多の矛盾が含まれてゐる。生徒には成る可く澤山語記させなければならぬといふのが内藤博士のお説であつたが、學問をするには云ふに及ばず世の中に立つて働くにも、少し高等な仕事になると恐らく語記力が大切になつて來るに違ひない。現今の中等學校・高等學校では所謂語記物といふのがあつて夫が稍もすれば輕視され勝なのは非常に間違つてゐる。或意味から云へば語學などは智識でない。語學だけ勉強して學校を卒業するから學校上りの無智識階級が出現するが、之は一つには所謂語記物の語記の標準がない爲であらう。矢野博士の

理解と記憶を併行せしむる新提案は其だよい着想であるが、惜むらくは遂に中等教科書とならなかつたことを。今より三十年前那珂博士の東洋小史が中等學校用教科書として編まれて中學校に用ゐられず、而も現今迄一般參考書として重寶がられて來た。恐らく本書も國民讀本としての新使命を遺憾なく果すことであらう。書中至る所に博士の東洋史に對する獨特の識見が伺はれるが、殊に最近世支那を中心とする外交關係、並びに民國以後の國情をアツプ・ツ・テートに纏められたものは外にないので最も便利である。

博士の兩著を此に併せ紹介する所以のものは、兩書が互に相表裏して、東洋の過去並に現在に對する著者の識見を窺ふ可きものと信じたによる。

（國民東洋史大綱 目黒書店發行、本文二〇三頁、定價金壹圓九拾錢。滿洲國歷史 同書店發行、四六判本文三五四頁、定價金貳圓五拾錢。）（以上宮崎）